＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

広げよう！学びと仲間の輪

～寺子屋～

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第１章　プロジェクトの概要など

１．プロジェクトの名称、目的など

本プロジェクトの名称は､｢広げよう！学びと仲間の輪～寺子屋～｣である。

私たちが生きる現代は隣に住んでいる人を知らない、言葉を交わしたことがないなど、家庭と地域社会との関わりが希薄になってきている。今後ますます複雑な社会になるにつれて、様々な人と関わる力が子どもたちに求められているが、それを学校教育だけで育むことは困難である。そこで私たちは、かつて「寺子屋」として教育を担ってきた、教育の原点ともいえる寺院に着目し、社会教育の視点から子どもたちと関わろうと考え、本プロジェクトを行うこととした。

２．代表者および構成員

・代表者

梅田　ちひろ　社会領域専攻　２回生

・構成員

木本　玲央　社会領域専攻　２回生

岸田　茉子　国語領域専攻　４回生

鳴橋　杏里　国語領域専攻　４回生

３．助言教員

西井　薫　先生

４．協力団体

・遍照院（京都府宇治田原町）

本プロジェクトで行ったイベントの会場であり、イベント当日の運営にも協力していただいた。

第２章　内容や実施経過など

１．イベントの準備

（１）当日の企画

〈時期〉６月～7月

寺院、遍照院に協力していただいて開催するイベント「てらこやへんじょういん」当日の企画を行った。学生だけで３回、遍照院と合同で１回の計４回打ち合わせを行った。打ち合わせで決定した当日の主な企画は以下の通りである。

・レクリエーション：アイスブレイクや自己紹介

アイスブレイクでは、数集まりというゲームを行った。学生が手を１回たたくと子どもたちもそれに合わせて手をたたく。次第にその数を増やしていき、何回目か手をたたいた後に「集まれ！」と言うと、たたいた回数のグループを作る、というもの。

自己紹介ゲームは、子どもたちと学生で円を作り、順に自分の名前を言う。1人目は「私は〇〇です。」と言い、2人目からは「私は〇〇さんの隣の△△です。」といようにつなげていく。

これらの活動により、子どもたちの緊張はほとんどほぐれていた。

・モノづくり体験：動くペン立て

イベントの思い出に残るものとして工作を行う。

工作は身近なものを使うことで、身の回りにあるものを大切にしようとする心を育むねらいがある。また、対象となる子どもは幅広い年齢が予想されたため、できるだけ工程が簡単になるよう試作品を作る等して一から考えた。

・遊びの企画：スイカ割りやフルーツ流しなど

子どもたちの積極的な交流を図るためにいくつかの班を作り、スイカ割りやフルーツ流しなどの遊びを企画した。この際に使用するスイカや竹は寺子屋のイベント開催を知った地域の方々が協力して用意してくださった。

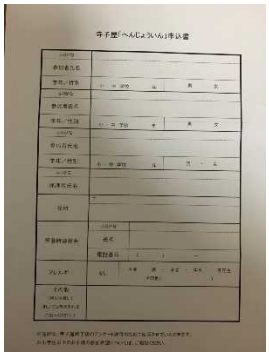
・寺院ならではの体験：掃除、お勤め体験

寺院との打ち合わせの中で､｢子どもにとってお寺は近寄りがたい・怖いなどの印象があるのではないか｣というお話をお聞きした。そのような子どもたちに友達と「お寺ならでは」の体験をさせることでお寺での思い出を作るねらいで企画した。

（2）イベントの広報

〈時期〉7月中旬～8月上旬

イベントを広報するために、以下のようなチラシを作成した。



また、裏面は申込書とし、食事の際のアレルギーや要望等を書く欄を設け、保護者の方の不安を軽減することができるようにした。

さらに、京都府山城地域の地方紙である「洛タイ新報」でもイベントの広報をしていただいた。

2．イベントの実施

（1）当日の様子

イベントは、8月25日（日）に遍照院で行われた。

写真：自己紹介ゲームをしている子どもたち

初めは一緒に来た友達や兄弟と話していたが、レクリエーションを進めていくうちに、少しずつ他の友達と言葉を交わす姿が見られた。必死になって友達の名前を覚えようとする子どもたちの様子が見られた。

写真：勉強を教えてもらっている子どもたち

各自が持ってきた夏休みの宿題やこちらで用意した教材を使って勉強をしている。学生は学習の指導や子どもに合った教材の選別を行った。次第に子どもたち同士で教えあう場面も見られるようになった。

写真：食事をしている子どもたち

遍照院と地域の方々が作ってくださったカレーを昼食として食べた。学生は協力して準備を行うこと、昼食を用意してくださった方々に感謝して食べることなどを指導した。

写真：牛乳パックで動くペン立てを作っている子どもたち

牛乳パックを使った動くペン立ての作り方について、一斉指導と個別指導を使い分けながら教えた。デザインの工夫の交流や道具を譲り合いながら使う子どもたちの姿が印象的だった。

写真：子どもたちが作った作品

写真：スイカ割りをする子どもたち

スイカ割りの際はただ見ているだけでなく、声や音を出しながらにぎやかに応援することで子ども同士の積極的な交流を図った。学生は周囲の安全にも十分に配慮しながら行った。

写真：フルーツ流しをする子どもたち

地域の方がお寺の竹林から切り出してくださった竹を利用してフルーツ流しを行った。年上の子どもが年下の子どものためにフルーツをとることを我慢したり、取れたフルーツを仲良く一緒に食べたりと、子ども同士の積極的な交流が見られた。

写真：寺の廊下を水拭きする子どもたち

真っ白なぞうきんをどれだけ黒くできるかと、子どもたちが一生懸命に掃除している姿が印象的だった。掃除をする場所や道具を役割分担して行った。

写真：お経を唱える子どもたち

お勤めの時間では遍照院の副住職から「おじぞうさま」のお話をしていただき、子どもたちは興味深そうに話を聞いていた。最後の挨拶では、学生から子ども一人一人にこの一日で頑張ったことや成長したことを伝え、賞状を渡した。子どもたちは自分が頑張っていたことを褒められ、嬉しそうにしていた。

3．事後アンケート等の作成・送付

〈11 月中旬〉

イベント終了後、後期に入ってからミーティングを行い、参加者への事後アンケートを作成した。

また、アンケートにはイベント当日の子どもたちの様子を収めた写真や動画をまとめた DVD を作成し同封した。詳しい様子を見ておられない保護者の方と一緒に新しくできた友達や当日の思い出を語る機会を作ることを目的として作成した。

出来上がった DVD とアンケートに挨拶状を同封し、参加者へ送った。

第３章　結果や成果など

1．イベントの成果

（1）地域への広報

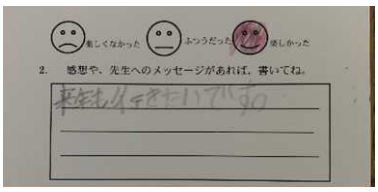
イベントの告知をしていただいた新聞社「洛タイ新報」によって地域の方々にイベント当日の様子を伝えるとともに、私たちの活動についても広報することができた。

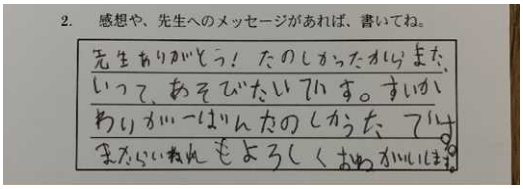
宿題もスイカ割りも

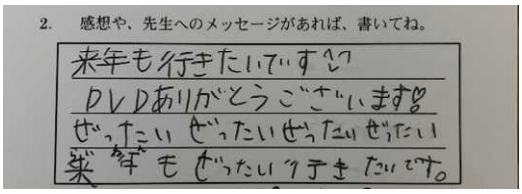
地域一体「大夏祭り」

（2）事後アンケート結果

イベント参加者への事後アンケートの結果は以下の通りであった。（2020 年 1 月 22 日現在の結果）



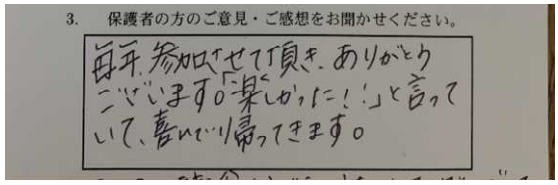


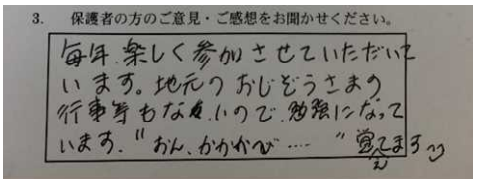


結果を見ると、全ての参加者が「てらこやへんじょういん」に非常に満足していたことがわかる。

子どもたちの感想を見ると、「来年も行きたいです」という感想が多く見られた。イベントを通して学校が異なる友達と交流することの楽しさを伝えることができたと言える。また、遊びの企画はもちろん、掃除やお勤めなどお寺ならではの体験にも楽しかったという感想が寄せられた。事前の打ち合わせの際にお聞きした話を生かした企画をすることができたと言えるだろう。

さらに、保護者の方へお聞きした感想は以下の通りである。





回答を見ると分かるように、イベントは保護者の方からも高い満足度を得ることができた。感想の中には来年以降のイベント続行を期待する声もある等、大きな成果があったと言える。しかし、回答の中に、送付した DVD が家のレコーダーでは見られなかったという意見もいただいた。この点は、来年度以降の改善が必要である。

（3）遍照院の方との反省会

イベント終了後、遍照院の方と反省会を行った。「てらこやへんじょういん」の活動を始めてから 4 年が経ったが、1 年目から継続して活動に参加してくれている子どもたちが多いことに大変喜んでおられた。わずか一日であっても子どもたちの教育の場としてお寺が活躍する機会があるのであれば、今後も様々な形で協力すると言ってくださり、イベントを通して協力していただいた寺院にも非常に満足していただくことができた。

第４章　まとめと反省、今後の展望など

１．まとめと反省

（1）活動の成果

本プロジェクトでは、大きく分けて二つの成果を得ることができた。まず一つ目は、子どもたちに様々なことを学ぶ場を提供できたということである。今回のイベントには学生を除く 10 名の子どもが参加してくれた。地蔵盆の時期と被り昨年度と比べ半分の参加人数となったが、参加した子どもたちは「来てよかった」「来年も来たい」と声を揃えて伝えてくれた。学生が想像していた以上に活動後の子どもたち同士の仲が深まっていた。また子どもたちは、昼食を作ってくれた人や施設を用意してくれた人の顔を皆があら過ごすことで、自分たちのために地域の様々な人が力を出し合ってくれたのだということも学び取ることができた。

もう一つの成果は、私たち学生の学びである。イベントを企画・運営するにあたって、遍照院を中心とした地域の方々に様々な場面でお力をお借りした。地域と繋がって子どもを育てるということはどういうことかを身をもって体験することができた。また、子どもたち一人一人への丁寧な指導の大切さを実感することもできた。学校という枠組みがない中で、子ども同士の交流をどう促すかということも大きな課題の一つであったが、勇気を出して新しい友達を作ろうとする子どもたちの姿に私たちの方が多くのことを学ぶことができた。

（2）反省

本プロジェクトでの反省は、活動が少なくなってしまったこと、学生の人数が不足していたことである。前者については、昨年度も反省として挙げていたが、昨年度と比べプロジェクトを運営する学生のメンバーが大きく変わったこともあり、新しいことに挑戦できないまま今年度も活動が少なくなってしまった。後者については、学生に対するプロジェクトの宣伝が十分でなかったことが課題である。

２．今後の展望

（１）学内における活動

今後の展望として、まず、学内における広報活動を行いたいと考えている。私たちの活動をより多くの学生に知ってもらい、様々な学年・領域の学生が集まるという強みを生かしてより良いイベントの企画などを行っていければと考えている。

（２）学外における活動

今年も夏休みに遍照院をお借りして開催したイベントのみであったが、今後は外部団体と協力したり、遍照院での新たな活動を企画したりなどして活動の幅を広げていきたいと考える。